

平成22年6月28日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2006～2009

課題番号：18251015

研究課題名（和文） トランスナショナリズムと「ストリート」現象の人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Research on Transnationalism and ‘Street’ phenomena

研究代表者

関根 康正（SEKINE YASUMASA）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40108197

研究成果の概要（和文）：ストリートの人類学は、流動性を加速させるネオリベラリズムとトランスナショナリズムが進行する再帰的近代化の現代社会に資する人類学の対象と方法を探求したものである。現代の「管理社会」下ではホーム・イデオロギーを逸脱したストリート現象の場所は二重の隠蔽の下にあるので、画定しにくいがゆえにまずは正確な対象画定が重要になる。系譜学的にそれを掘り起こしたうえで、そのストリート現象についてシステム全体を勘案した体系的なエスノグラフィを書くことを試みた。この<周辺>を<境界>に読み替えるというネオリベラリズムを適切に脱却する人類学的な新地平を開拓した。

研究成果の概要（英文） This project on Anthropology of the Street has explored new themes and methodologies for anthropology by focusing on ‘street’ phenomena in contemporary society – a society marked by increasing fluidity driven by the ‘reflexive modernization’ associated with neo-liberalism and transnationalism. Challenging the constraints of the control society at its periphery, and flouting that society’s home orientation, street phenomena are doubly repressed and hidden. The first task, therefore, was to clarify what street phenomena are and where they are taking place. Having excavated the genealogies of street phenomena, the second task was to compile systematic ethnographies, taking into due account the power relationship between the centre and the periphery. By rereading the ‘peripheral’ as the ‘liminal,’ we have sought a new horizon for anthropology that will offer resistance to the overwhelming neo-liberal tendency.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	8,500,000	2,550,000	11,050,000
2007年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2008年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2009年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
年度			
総計	32,800,000	9,840,000	42,640,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：文化人類学、民族学、文化研究、トランスナショナリズム、ストリート文化

1. 研究開始当初の背景

| 本研究は以下のような経緯で設定された。

本研究の代表者は、公募により選定された国立民族学博物館の共同研究「ストリートの人類学」を2004年度より主宰してきた。この共同研究会は年に4回(初年度は3回)の共同研究会を民博で開催する形で実施される3年間のプロジェクトであり、2007年度まで行われる。本科研申請時は2年度目であったが、それまでに5回の研究会を開催し、多様な地域の研究者がそれぞれのストリート現象を論じてきた。その研究発表の要約は民博のホームページの共同研究会のページにアップされ、閲覧可能な状態で成果を逐次公開しており、相当なアクセス数を得ていた。

実は、この「ストリートの人類学」研究会の立ち上げには、更に前史があって、代表者は1998-2000年度の間客員教授として「<都市的なるもの>とは何か?」と題した共同研究会を組織したことがある。その成果はすでに2004年2月に日本生命財団の出版助成を受けて『<都市的なるもの>の現在:文化人類学的考察』として東京大学出版会より公刊された[関根 2004]。つまり共同研究会「ストリートの人類学」はその研究土台の上に企画されたものである。

こうして、理解されるように、本研究にとって、二つの前史になる共同研究会の蓄積はきわめて強固な土台であり、それ無しには本研究の申請も構想されなかった。すなわち、研究会メンバー及びゲストスピーカーからなる地域・関心の多様な研究者と継続的に議論を重ねてきた蓄積は、本研究遂行に非常に有利に働く共有財産であり、共有基盤である。したがって、この科研応募は、上記の「ストリートの人類学」に結集して議論を重ねてきた人々が、再びそれぞれのフィールドのストリート現象の新たな実相を求めて、更なるフィールドワークを実践してストリート問題を実証的に深化させることを願目としたのである。したがって、「ストリートの人類学」共同研究会のメンバーの中核にいる中堅の研究分担者の調査研究を中軸にしつつ、さらに若手のメンバーに研究協力者としてフィールドワークを大いに実践してもらいたいと考えた。共同研究会は会合を持ち議論を重ねているが、本研究の問題意識にそったフィールドワーク実践はまだ不十分な状態であると痛感され、世界各地のストリート現象を更に詳しく記述検討する必要がある。それがこの科研申請に至った経緯である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「下からの視点」と重なるヒューリスティック・アプローチを特徴とする人類学的方法・視座をもって、グローバル・フローの吹き荒れる現代の生活世界の現実をできるだけ正確に描写・分析することにある。その意味で、トランスナショナリズム

研究の一翼を担うものだが、非定住的な「ストリート」現象に特に注目することで、従来の研究では看過されがちであった、グローバリゼーションによって活性化するローカリティ(「勝利するローカリティ」)ではなく、抑圧され駆逐される「敗北したローカリティ」の救出に明確に標準を定める。「下からのトランスナショナリズム」をさらに詳細に腑分けすることが生きられる現実分析には不可欠であるからである。

3. 研究の方法

本研究は4年間に渡る海外学術調査を敢行することが基本的な内容である。

研究代表者および連携研究者は総計14名であるが、そのうち海外調査を行う者が12名、国内調査を実施するのが2名である。原則的には、海外調査者12名は6名ずつの2グループ(海外調査第一グループと海外調査第二グループとする)に分けて隔年で調査を半数ずつ実施することにする。中堅研究者は既に現地との長く深い関係が樹立されているので、すぐに本研究の課題に現地で取り組めるので、それぞれ4年間のうちに二度の現地調査であるが、相応の成果が期待できる。

若手の研究協力者として、大学院博士課程在学者5名、朝日由実子(上智大学大学院)・国弘暁子(お茶の水女子大学大学院)・内藤順子(九州大学大学院)・森田良成(大阪大学大学院)・山田香織(総合研究大学院大学)が、海外での集中調査を行った。研究協力者として阿部年晴埼玉大学名誉教授を依頼するのは、氏の文化をめぐる「後背地論」はストリート現象を論じる場合に不可欠な理論的射程を持っているので本研究のアドバイザーとして協力をお願いした。

4. 研究成果

主要な研究成果は、2009年の段階で、すでに計37章、約1000頁からなる『ストリートの人類学』上下(民博SER80,81)としてまとめられた。この主要成果に加えて、さらに、2010年には成果報告書・補完論文集が7月までに本科研用ホームページ上に公刊される。その中には、『ストリートの人類学』上下掲載論文の英語版要約集も収録される。

(1) ストリートの人類学の目標の画定: 脱ネオリベリズムのための人類学再考

ストリートの人類学は、「都市の(ofでありinである)人類学」ではあるが、「都市人類学」の部分なすようなプロジェクトではない。「都市の人類学」研究者Setha M. Lowは、編著『都市を理論化する』(Theorizing the City)』(Low 2005(1999))という編著の序論で、こう述べる。人類学的都市研究は、都市とは何かという都市の本質主義を検討する

のではなく、都市現象として現れている社会関係・象徴・政治経済などに関心を向けていくものであるとする。この意味での都市の人類学も、ストリートの人類学も、優れて現代社会全体の人類学そのものを探究するものである。歴史的に遡っても都市は、そして都市のストリートは、各時代の社会全体のあり方を敏感に先端的に反映し体現する場であったろう。

阿部年晴はこうした都市民族誌の視点とその重要性を、もっと大きな人類史のスケールで、もっと方法意識的で鋭角的に指摘していた(阿部 1989)。阿部は都市と都市的なものとを、都市的世界と非都市的世界という二つの異なる原理に根ざす社会のあり方の比較(都市の脱親和化の方法)の視野の中で、区別する。その手続きによって、都市的なものは非都市的世界にも存在することを見通す視座が与えられ、妖術的なものと都市的なものとの相応性を明らかにする。妖術は非都市的世界の都市的なものを体現し、他方、膨張する現代都市の様相の内に権力中枢と交易の結節という世俗的理解だけに留まらない、専門分化の小宇宙を通じた人工環境への過剰適応状況、言うなれば都市の変化のデーモンに取り付かれた都市世界には、再度宗教や呪術からのアプローチが可能であり必要であると説く。「民族誌的都市論は、日常生活をこのような全体的構図のなかでみなければならぬ。都市はコミュニティのそとに、社会的機能の集積の場として成立した。コミュニティの日常生活からみれば、それはもともと外的なものであった。生活物質を後背地に依存していたように、都市の生活は、基層的文化をも後背地から継承したのである。その後都市は文化の後背地を都市空間の内部にとりこんだ。それは都市の内部で基層的な文化をうみだす相対的に自律的なコミュニティであった。ところがこんにち、国家と市場経済と一体化した都市は、自己の内外で、自己存立の要件である文化的後背地を変質させ失いつつある。」(阿部 1989: 52)

本研究における都市への注目、そこでのストリート空間への注目の理由は、ここに良く述べられている。ストリートの人類学は、この意味での都市の変化のデーモンと新らたの後背地(生きられる文化)の構築が課題になる。私はこれを人類学の本議に立ち返る<境界論的転回>と呼ぶ。ストリートという、交通や移動を引き起こす差異・境界を時空間的に体現している場を、議論の対象に意識的に据え、そこでのフィールドワークとそれに基づく理論的議論を通じて、上記の研究目的の達成を試みた。

ベンヤミンのパサーージュをめぐる論にも似て、ストリートは「対象」であると同時に「方法」であり、境界論における「ベルクソ

ンの・ドゥルーズ的転回」とでも呼ぶべき生の哲学の議論へと向かう。「潜在的なるもの」を前提にした、運動的で、生成的な視点をストリートの検討から導き出し、現代社会を席卷する思潮である近代主義の新展開としてのネオリベラリズムへの異議申し立てを行うものである。その舞台としてストリートはふさわしい。近代主義の精神、それを体現する近代主義的管理空間では死を宣告され排除されるストリートが、それ故に「抵抗」拠点として期待できる場になる。このことを正当化する議論がある。大澤真幸は、マルクス主義において革命後になぜ真の民主主義の樹立と言わずに「プロレタリアート独裁」なのか、と問いを提出し、それに対して次のように答えてみせる。人民の統一性という民主主義の基盤を阻む力を有する資本主義(剰余価値というアンバランスをもちこむもの)に抗しながら、しかしナチズムのようにユダヤ人という「統一的なドイツ人民」の敵を創出しないやり方、むしろその排除された他者を民主的な意志の代表(社会的な普遍性に代理人)とみなす「プロレタリアート独裁」という独特の民主主義の基本構想を立てる必要があったと述べる。資本主義体制にも、またそれに対峙して立てられた「民主主義の一形態としてのファシズム」にも抗するものとして、「人民」の共同性、統一性ではなく、それがむしろ排除した他者に基礎づけられた独特の民主主義としての「プロレタリアート独裁」を提示する。この論を引用したのは、「プロレタリアート独裁」と同じ理論的位置に、流動破綻をもたらすネオリベラリズムという高度資本主義(流動性と再帰性だけを高め、アンバランスに「高度均質化」を進めるネオリベラリズム)に対して、それへの表面的対抗して出てくる防御的ブロック化としての各種ナショナリズムや新たなレイシズム(ホーム中心主義者のゲイティッド・コミュニティと排除されたストリートに投げ出されるアンダークラスとの差別的分離)に陥らないで、抵抗克服していくものとして、「ストリート独裁」を据えたいのである。これは人に注目すれば「プレカリアート独裁」とか「サバルタン独裁」と言ってもいっこうに構わないが、ここでは社会空間の縁辺という物理的な場にこだわって「ストリート独裁」と言っておこう。

もちろんそれはストリートのロマン化なのではない。むしろ逆であって、蒙昧に安易にロマン化したホームにプラッシュバックする主流に対して、鬼気迫るストリート的な現実を差し出すことが目論見である。人間の生の本源あるいは剥き出しの生(アガンベン)のビオスに回収できない他性の生としてのゾーエーに当たるもの(アガンベン 2003)に感応呼応するストリート性を差し出さねば

ならないほどに、現代は追い込まれたと言わなければならない。

ストリートの人類学は、脱ネオリベリズムを標榜し、知らぬ間に自分が自分で首を絞めていくような自己監査文化 (audit cultures) の檻の中に現実生活を閉じこめていく主流傾向に歯止めをかける意図を有している。そこにこの人類学的研究の社会的コミットメントの要諦があると自認している。このようなネオリベリズムの跋扈する社会での、対象化しにくい巧妙な差別と閉塞を、「ストリートの人類学」は明るみに出す意図を明確に持っている。この現代社会で生きられる人間を救い出すために考察する研究は増えてきている。たとえば、社会学と精神分析の間で仕事をする榎原愛子は著書『ネオリベリズムの精神分析』を世に問うた。ここで、その好著の第二章「再帰性のもつ問題」で、きわめて簡潔に取り組みの方向性を見極めるための基礎的整理をしてきていて、参考になる(榎原 2007)。その重要なポイントは、ギデンスやベックが言うように、省察としての自己再帰性と暴走している社会的(制度的)再帰性との区別を自覚的に行い、マクドナルド的主体に人間を非創造的に縮減してしまうような暴走を、良き自己再帰性を探究することで歯止めをかけることだという点である(Giddens 1991)(Beck 1986)(Beck, Giddens and Lash 1994)。そのときに再帰性が伝統よりも良いという前提も単純には首肯してはならない。伝統と言われるものは一回一回作り上げてきたものでないか、同様にローカルティもそういうものではないか、それはアルジュン・アパドゥライの近代性を問い直す仕事の主張のポイントでもあった(アパドゥライ 2004)(Appadurai 1996)。伝統やローカルティもまた再帰性を経て作られていたのである。その意味で埋め込まれた固定的な伝統と脱埋め込みの流動的な近代との二元論は理論的に相対化される必要がある。

そのような固定か流動かの二元論ではなく、日常的な生活世界が保ってきたはずの、正常な自己再帰性の空間を再評価し、現代において確保することが肝要である。そのための要点をこれまでの議論を整理する形で、3点記したい。いずれも現代の生活現場では言い出しにくくなっていることであるが、だからあえて述べる形になる。1) 生きられる人間はそう簡単に「説明責任」は果たせないというあたりまえの事実に戻ること。2) 人間は危険 (danger) とともに生きているのが常態であると覚悟すること、つまり有責性を外在化させ当事者に問いすぎないことでリスク社会化に歯止めをかけること。3) 規則ルールは現場に即応して生成的であるときのみ健全で人間が生きられる場を開拓できるものであること。

改めてこのような基準点を据え直すことによって、説明責任の履行とリスク化の増大との負のスパイラルに私たちを閉じこめるような、上からの間接支配的な抑圧政策に抗する方向性だけはまず確認することができるだろう。そして3)に関わるが、自己責任と外在要因の折り合い、危険とリスクとの折り合いをほどほどに止めるようなまともさを社会が取り戻すには、いつでもどこでも通用するような一般論で思考しては絶対になれないことが、重要である。そうしてはネオリベリズムの檻から脱出できない。そうではなく、ミクロな生活現場で具体的に身体をもって責任と危険とリスクの折り合いをもたらす解決策を探る過程をはずしてはならない。

このミクロな実践は、まさに、アパドゥライが『さまよえる近代』において明確に議論していた、具体的なマテリアルとコンテクストを踏まえたローカルティとネイバーフッド(近接、近隣)の絶えざる生産過程のことである。つまり、ローカル・ノレッジやストリート・ノレッジが果たしてきた役割こそが、固有の現実即したその場に固有の解決策なのである。排他的な「高度均質化」に抗する道は、そうした固有の場を拠点にしなければ拓かれてこない。ついでに公共の場からの葛藤の追放が非人格的な官僚化への後戻りをもたらすと、セネットの警句を思い起こしておくのも重要だろう(セネット 1975, 1991)。しかしあくまでも葛藤は平均化した公共空間においてもはや想定されるべきではなく、ミクロな固有の場において実践されるものとして学ぶのである。

(2) ストリートの縁辺と敗北したローカルティに注目する体系的エスノグラフィという成果

先に、ローカル・ノレッジとストリート・ノレッジとを並行的に記した。ローカルなものやストリートには共通点がある。どちらも主流権力から押し込まれた空間である。ローカルなものは、グローバル権力によって押し込まれ、ストリートはホーム権力によって押し込まれる。その意味でどちらもサバルタンの生きる縁辺空間となる可能性のある場所である。縁辺の場での生活は様々な主流の圧力のかかる受動的状況の中での抗争 contestation であり、不安定で持続しにくいブリコロールの生活構築サバイバルが展開する。このことは、ローカルな場やストリートが縁辺空間として切り取られ別の場所にあると言っているのではない。そういう縁辺空間は主流権力が作り出し、その力が浸透した空間として実現している。そこは、排除し管理する主流権力がその視点からローカルティやストリート性を意味づける取り込み

が作動している。この上から取り込まれたローカリティやストリート性によって、取り込まれなかったローカリティやストリート性は隠されることになる。つまり、ローカルな場はグローバル権力によってローカルの意味を、ストリートはホーム権力によってストリートの意味を規定される。そして、その規定によって取り込まれたローカリティやストリート性が、そのような権力への備給を行った基盤的ローカリティやストリートに成り代わってしまうために、廃棄されたローカリティがあったこと自体を隠蔽するのだ。これが隠蔽の隠蔽である。そうであるから、このことを明確にするために「勝利するローカリティ」と「敗北したローカリティ」とを区別する必要を説いた。ローカルの場、ストリートの場でのこうした隠蔽の隠蔽をこそ問題にしなければならない。これがネオリベリズム下の、管理社会化するポスト近代下でのストリート問題であり、ローカリティの問題である。すなわち、ストリートの人類学は、入り口としては文字通りのストリートから入るが、その出口では二重に隠蔽・消去された場所という広義（真）のストリートの発見へと、研究対象を展開・深化していくことになる。

二重に隠蔽された境界つまりの真のストリート、それこそがストリートの人類学が対象にする「ストリート化」した場所であり、それは、都市空間の中に穴ぼこのように散在し偏在する縁辺・隙間なのである。家無し宿無しの都市民はそうした隙間を縫って生きる。その意味では、日本の大都市のまんが喫茶やインターネットカフェやマクドナルドもまたストリートな場所と言うことができる。いわゆるホームレス（野宿者）だけではなく、ワーキングプア、低賃金で働く増えるばかりの外国人労働移民など、格差社会のアンダークラスに振り分けられる現代のサルタン（プレカリアート）が生を繋ぐ場所が広義（真）のストリートであり、文字通りのストリートはむしろ観察の入り口なのである。定義するとすれば、社会空間の縁辺・隙間こそが「ストリート化」を体現したストリートということになる。ここでもう一度正確にいつておかなければならないのは、縁辺・隙間は自立した空間ではない。主流空間のすぐ脇に寄生して張り付くように存在する場であり、主流社会の強い空間の意味づけを前提にした流用の所作が見いだせる場所ということである。「ストリート化」した場所はしたがって、主流の流れをすでにエネルギーにしているし、それ無しには成り立たない。そういう縁辺・隙間なのである。勝利の力のネガのようにへばりつく敗北の位置を元手に生き延びる場所のことである。インドで言えば、幹線道路の中央の車道と端の歩道との

両方があるのはじめてストリートの縁辺に「ストリート化」した場所は生成している。この抗争的な接点が無ければ、道であってもここでの議論の対象としてのストリートな場所にはならない。現代日本であれば、歩道も殆ど主流の力で抑えられているから、インドの歩道に当たる接点的な流用空間が、公園や安いカフェに見えにくくずれ込むのである。

このようにストリートが見えにくい場所にずれ込むのは、近代型第三世界的貧困とポスト近代型第四世界的貧困との違いである。現代インド社会の大都市の路上と今日の日本やニューヨークなどのグローバルシティの路上との両極的対比は、程度の差になりつつあるがまだ依然可能だろう。前者の方が路上生活者と社会との関係に血が通ったところがある。日本社会の歴史を遡って考えたときの「ものもらい」ないし乞食（こつじき）を吟味する野村雅一の言い方に従えば、その伝統をわずかに背負った乞食（こじき）はなおも通りに顔を向けているが、ホームレスは通りに背を向けているという。この社会との接続性についての乞食とホームレスの対比（その間に程度差だけに還元できない質的転換が起こっている）が近代型第三世界的貧困とポスト近代型第四世界的貧困との間にあるということである。だが、インドの路上も後者に向けて厳しさを増していることも指摘しておかねばならない。つまり、現在のインドの都市の路上生活者の現実には両者の要素が入り交じっているだろう。というのは、農村から都市スラムに流れ込んでくるあり様が、単に量的に増大したというより、経済自由化（構造調整政策）を受け入れた1990年代以降の社会・経済的構造変化に対応して激化している点で、すでに第四世界的であるし、国内外からの移民への排斥行動の顕在化などでも新たな時代状況に入っていることの証である。たとえば、わずかな教育機会と貧困に苦しみ、クーリーまでした末に南インド映画界のスーパースターにまで上り詰めたラジニカーント（1949年生まれ）のような人物（Sreekanth 2008）が出てくる可能性の余地、つまり主流社会と下層社会とが差別的であれ一定の有機関係を保持していたのが第三世界的段階であったとしたら、今やそのような関係はより厳しく切断されて管理型社会の特徴となる新たな格差社会化がインドでも進行し固定化し始めている。

とにかく、上述したようなストリートの定義に則れば、違和感なく、グローバリズムが席卷するグローバル社会空間の縁辺としてのローカルな場所というものに、ストリート概念を敷衍できることが理解できよう。ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京など世界都市ないしグローバル都市は、その縁辺に移民

集団を含むアンダークラスないし第四世界を抱え込んでいる。グローバル資本主義が作りだしたトランスナショナル・スペースにおいて、その政治経済中枢のメトロポールからの力にへばりつくように生きる国内下層や下層移民が縁辺空間の住人となっている。このようなグローバルスケールのサバルタンたちが住む場所は、当初は社会の一体化を前提にした同化政策（その中身は、仏的「統合」や、英国的・米国的な「多文化主義」などいくつかのヴァリエーションがある）の対象であったが、そうした福祉国家的手法が限界を露呈してきて、九〇年代以降明らかに露骨な分離的管理的政策、つまり管理社会化がかつての宗主国で目立ってきている。ここに立ち上がっているのがトランスナショナルな社会空間の縁辺というストリート問題である。

具体的に描けるストリートの縁辺から大きな社会空間の縁辺というストリートまで、現代社会がかかえる同じ問題が貫いている。この問題を解決すべき課題として据えるとき、ストリートの人類学は、ベンヤミンを当然踏まえた渋谷望の言う「敗北者の考古学」と重なる志を有するだろう。二重に消去されたとされるものを、消されたはずのその縁辺での生きられた生活世界において発掘するのである。このストリートの人類学は、まちがいなく、阿部年晴のいう、人間である為に普遍（不変）的に必要な人間再生産の揺籃、つまり「<後背地>としての文化」を探究する研究と併走しているものと信じる。

主流秩序からは無秩序として消去・排除の対象になった様相のなかに、不均質な雑多さを当然視するような「敗北したストリート」の生活世界にあつたらう<都市的なもの>、つまりセネット的な意味での「無秩序の活用」（セネット 1975）に再び光を当ててみたいのである。そのときは、主流秩序が取り込んだビオスの生が覆う世界においてもなおある穴ぼこや隙間にゾーエーの野生の生を掘りあて、そこからとって返して生活秩序を組み直すような境界的思考が求められるにちがいない。そこでは、計画、効率の価値では測れない生活感覚世界や、あるいは結果的に構築される一種の「何も共有しない者たちの連帯、共同性」（リングス 2006）などが示唆するように、活用と言えないような活用、streetwisdomとも言えないstreetwisdomまで射程に入れる必要があるに違いない。そのために、イデオロギー・レベルでの主流の価値意識・言語の単なる否定や反転ではなく、生活感覚や生活感情という身体性を基盤にした「全体的理解」に基づく根本的反省が必要に違いない。そこに、主流言語が自然化した形で実践されてしまう構造的差別（「三者関係の差別」（関根 2006））を無効化するような視点転換を促してくれる、ストリートの本

格的なエスノグラフィーが待たれる理由があった。本研究は、『ストリートの人類学』および成果報告書・補完論文集の内容が明らかにするように、このような意味での、貴重なフィールドワークに基づく多くのエスノグラフィーが集積できたことで、その目的を大いに達成したことになる。

その結果、「ストリート化」した場所のエスノグラフィーの集積は、絶望の中に希望の灯を私たちに見出させる。ストリート現象が都市の無意識の地層に届くとき結果的に権力構造をも飲み込み機能不全に追い込む。思考の入り口としての権力構造の生産する縁辺という亀裂は、思考の出口において権力構造の向こう側に出て無効化する地平を露呈してくれる。これこそストリートの創造性である。もちろんそれは権力構造の下層の痛みを無視することではなく、それこそが彼らの痛みと努力を真に受け取り普遍的な形に展開していく道だと信ずるからの所為である。

権力構造とは、ツリー状の思考の産物である。そこは思考の端緒になるかもしれないが、終着点ではあり得ない。ストリートは都市計画という条理空間の建設の産物であるのに、面白くもそれを裏切る。なぜならストリートは繋ぐという関係樹立の流動という性質を本質的にもつゆえに平滑空間への展開を運命づけられている。都市においてストリートという縁辺空間の道筋を辿る動きは、都市の深層、都市の無意識にいたる可能性を孕んでいる。都市計画が期待するストリートは目的地に到達することだろうが、ストリートはその表だった機能に付随しながら、それを越えた過剰性を移動の過程において産出する。ストリートの縁辺性とはこの過剰な脱線性のことである。これは、ベンヤミンが個物そのもののニュアンスを聴き取ると称した営みでもあろう。ドゥルーズならば、非-コミュニケーションの断絶的空隙の創出であり、そうした空隙がリゾーム的につながる平滑空間の現出と言うのだろう。小田亮は研究会の発表において、管理された条理空間を平滑空間に変容させるような人々の実践を語ることが、ストリートの人類学の役割だろうという、研究会の早い段階で鋭く、卓見を述べていたことを記しておこう。小田は、「顔のある」ことや「かけがえのなさ」を重視し、それを関係の過剰性として説明しているが（小田 2007）、そのことは、私が目下「弱い表象ないし表現」を聴くこと、「弱いコミュニケーション」の獲得に注目することと重なりと理解している（（関根 2007）参照）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 98 件）

①小田亮「真正性の水準について」『思想』1016号、査読無、2009、pp. 297-316。

②鈴木裕之「ストリートで生成するスラング：コート・ジボワール、アビジャンの都市言語」『アフリカのことばと社会：多言語状況を生きてということ』査読無、三元社、2009、pp. 161-187。

③近森高明「Between the 'Media City' and the 'City as a Medium」『Theory, Culture & Society』Vol. 26(4)、査読有、2009、pp. 147-54。

④小田亮『「二重社会」という視点とネオリベラリズム：生存のための日常実践』『文化人類学』74-2、査読有、2009、pp. 272-292。

⑤松田素二「グローバル化時代における共同体の再想像について」『哲学研究』584号、査読有、2008、pp. 1-35。

⑥関根康正・小田亮・近森高明・鈴木裕之・加藤政洋・玉置育子「特集 ストリートの人類学」『民博通信』116号、査読有、2007、pp. 1-17。

⑦関根康正「「資本としての知識」から「資源としての知識」への視点の移行がもたらすもの」『資源人類学 知識資源の陰と陽』第3巻、査読有、弘文堂、2007、pp. 219-248。

⑧Yasumasa Sekine, "Sacralisation of the Urban Footpath, with Special Reference to Pavement Shrines in Chennai City, South India", *Temenos : Nordic Journal of Comparative Religion*, 42-2, 査読有, 2006. pp. 79-92

〔学会発表〕(計48件)

①関根康正 "Street, Transnationalism and Migration", Department of Sociology and Social Work, 2010年3月, University of Bucharest (Bucharest・Romania) .

②関根康正 "Toward an Anthropology of the Street : Street Phenomena in the Era of Reflexive Modernization", V&A/RCA research seminar, 2009年2月, Royal College of Art and Victoria & Albert Museum (イギリス) .

③棚橋訓「「第三世界」と「第四世界」の捉え方をめぐって:その系譜と模索」、国立民族学博物館共同研究会「生の複雑性をめぐる人類学的研究—『第四世界』の新たな記述にむけて」、2008年12月、成城大学(東京都)。

④トム・ギル "Responses to Homelessness in Japan, the United States and Britain — an Anthropological Approach", Abe Fellow's Retreat 2007, 2008年1月, Hilton Hotel Cocoa Beach Florida.

〔図書〕(計21件)

①小田亮『グローカリゼーションと共同性(グローバル研究叢書1)』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、2010、274

頁。

②関根康正(編著)『ストリートの人類学上・下巻』国立民族学博物館、2009、970頁。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.transnationalstreet.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関根 康正 (SEKINE YASUMASA)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40108197

(3) 連携研究者

野村 雅一 (NOMURA MASAICHI)

総合研究大学院大学・副学長

研究者番号：60142014

小田 亮 (ODA MAKOTO)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：50214143

松田 素二 (MATSUDA MOTOJI)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50173852

小馬 徹 (KONMA TORU)

神奈川大学・人間科学部・教授

研究者番号：40145347

Kleinschmidt Harald

筑波大学・人文社会科学研究所・教授

研究者番号：60225240

松本 博之 (MATSUMOTO HIROYUKI)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：70116979

棚橋 訓 (TANAHASHI SATOSHI)

お茶の水女子大学・文教育学部・教授

研究者番号：50217098

鈴木 裕之 (SUZUKI HIROYUKI)

国士舘大学・法学部・教授

研究者番号：20276447

Gill Thomas P.

明治学院大学・国際学部・准教授

研究者番号：50323655

加藤 政洋 (KATO MASAHIRO)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：30330484

島村 一平 (SHIMAMURA IPPEI)

滋賀県立大学・人間文化学部・講師

研究者番号：20390718

玉置 育子 (TAMAKI YASUKO)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・講師

研究者番号：80369850

近森 高明 (CHIKAMORI TAKAAKI)

日本女子大学・人間社会学部・講師

研究者番号：10411125